SPORT CAREER SUPPORT CONSORTIUM
スポーツキャリアサポートコンソーシアム

変わらない自分でいるために環境を変える



奥幸那

元バドミントンナショナルユースチーム代表

高校非常勤講師

バドミントンコーチ

バドミントン　yukina　OKU

競技との出会い

1988 年生まれ。9 歳の時に地元のスポーツ少年団に入団したのがきっかけ。よい指導者に恵まれ、バドミントンの楽しさを知り「もっとやりたい、もっと強くなりたい」という気持ちがどんどん湧いてきて、小学校５年生から全国大会に出場できるほど練習に打ち込んだ。中学校から高校３年生までジュニアナショナルチームに所属し、数多くの海外遠征を経験した。

これまでのキャリア

●2000 年　全国小学生 ABC 大会　A の部　準優勝
●2002・2003 年　全国中学校バドミントン大会　シングルス３位
●2005 年　インターハイ　シングル　準優勝
●2006 年　オーストラリア国際　シングルス３位
●2007 年　NTT 東日本入社　ナショナルユースチームで海外遠征を経験する
　　ベトナムオープン　シングルスベスト８
●2008 年　スマイリングフィッシュタイサテライト　ダブルス優勝
●2012 年　NTT 東日本退社　筑波大学入学
●2012 年　インドネシア スラバヤカップ　シングルス３位
●2014・2015 年　インカレ団体優勝

●2016 年　全日本教職員大会　シングルス優勝

■高校卒業時

高校卒業後の進路については、大学進学も考えたが、「世界を目指したい」という強い思いから、日本代表選手が数多く所属する企業スポーツチームの NTT 東日本でプレーすることを選択した。

■社会人時代

NTT 東日本では午前中は社業、午後からは企業スポーツ活動（練習）をして、競技優先の恵まれた環境下で競技力向上に取り組んだ。社会人１年目から３年間、ナショナルユースチームに所属し、国内大会だけでなく海外遠征での経験も積んだ。
しかし、社会人のレベルの高さに苦戦することも多く、全日本総合バドミントン選手権大会ではベスト 16 以上の結果が出せなかった。ジュニア時代のように思うような結果が残せず、社会人４年目以降はナショナルユースチーム代表に選出されなくなり選手引退を考えるようになった。
社会人５年目になり、NTT 東日本の社業に専念することも考えたが、もう一度自分を見つめなおしたとき、バドミントンへの熱い思いが込み上げてきて、自分の信念を貫き通すために大学進学という選択に至った。



■教員免許取得と指導者になる目標を持って

大学受験にあたって、筑波大学のバドミントン部に素晴らしい先生がいることを知っていたので、筑波大学にどうしても入りたいと思い、セカンドキャリアを考えた社会人５年目から受験の準備を進めた。
NTT 東日本で５年間所属していた時の自分を振り返り、最も大切な「知」を欠いて競技経験を積み重ねてきたと気付いた。自らを知る「知」を求めて筑波大学に進学し、体育専門学群で中・高教員免許を取得した。また主専攻の健康・スポーツマネジメントだけでなく、内科系スポーツ医学研究室に所属し、アスリートのコンディショニングについても学んだ。競技スポーツだけでなく生涯スポーツについても学び、プレーヤーとしての自己を形成すると共に人との関わりの中で「他者」の理解にも向かう「知」を獲得した。選手としても、４年間インカレに出場し、大学３年・４年時は団体で二連覇を達成した。
母校の県立岐阜商業高校の教育実習で、授業や部活動指導で生徒と関わり、生徒一人ひとりの力を引き出し、個性を伸ばすことに喜びとやりがいを感じ、教員の道に進むことを決意する。その後、筑波大学に進学したことで幅広い人脈にも恵まれ、岡山インターハイの関係で指導者として声をかけてもらい、岡山県にご縁をいただくこととなった。

■教員とバドミントン指導者としてのセカンドキャリア

正規の教員として１年間務めたが、バドミントンを通してもっと沢山の人たちと関わりたいという気持ちが強くなり、非常勤講師に変わる選択をした。勤務する高校の部活動で指導を行いながら、スポーツクラブでバドミントン教室を開講したり、プライベートレッスンも行った。その傍ら、自分自身も練習やトレーニングを積み、全日本総合選手権出場を目標に競技を続け、高校１年生から全日本総合選手権に通算 14 回出場した。この「継続」と「蓄積」が自分の指導者としての強みであると自負している。

■大好きなバドミントンを教える楽しさ

現在は初めてラケットを握る子供や高齢者の方、ジュニアのトップ選手など幅広い年代にバドミントンを教えている。「できる」喜びを感じてもらったり、健康な体づくりのお手伝いをしたり、レッスンを受けてくれる人とコミュニケーションを図りながら、幸せな気持ちになってもらうことが目標である。そんな幅広い世代の人たちに競技の楽しさを伝えられることに自分自身も幸せを感じている。

■環境を変える勇気

常にトップを目指すアスリートは必ず転機が来る。そんな時、環境を変えてみる勇気も必要だと思う。ただ、環境は変えてもアスリートとして培ってきた経験を活かし、信念を持ち続けることが大切だと思う。変わらない自分でいるために環境を変えるのだ。


UNISYS
TTBANK
UNIS

なりたい自分を目指して全力で取り組めば必ず道は開ける。自分と仲間を信じることを諦めない事が大切



サッカーセルビア代表コーチ

喜斐斗勝史

サッカー　katsuhito KINOSHI

競技との出会い

1964 年生まれ。幼稚園の頃、母親の勧めで地元のサッカースクールに入部し、直ぐにサッカーが大好きになった。小学生の頃には東京都選抜チームの一員として全日本少年サッカー大会に出場した。

これまでのキャリア

●1987 年　日本体育大学卒業　東京教員クラブ　青梅 FC でプレー
●1997 年　ベルマーレ平塚でプロ指導者キャリアスタート
　セレッソ大阪、浦和レッズ、大宮アルディージャでコーチを歴任
●2004 年　尚美学園大学サッカー部ヘッドコーチ　三浦知良氏パーソナルコーチ
●2005 年　横浜 FC でコーチ
●2008 年　名古屋グランパスのコーチに就任、2015 年までアシスタントコーチを務める
●2009 年　JFA S 級コーチライセンス取得
●2015 年　中国スーパーリーグの広州電力でヘッドコーチに就任
●2021 年　セルビア代表コーチに就任　2022 年ワールドカップ、2024 年欧州選手権（EURO）に出

場

■サッカーの指導者を目指した学生時代

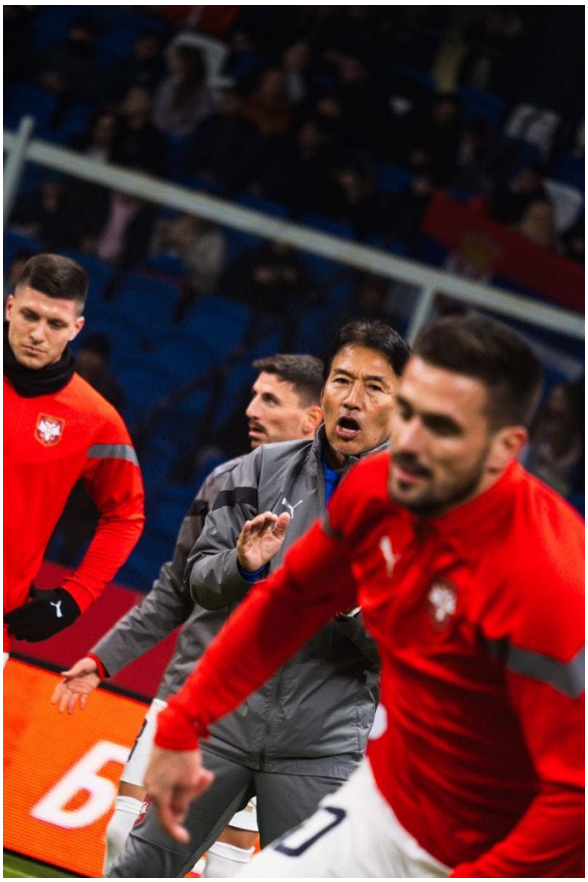
小学生の頃から夢中になったサッカーだったが当時はまだプロサッカーというのがなかった時代で、小学校卒業時の将来の夢は、『選手引退後は、サッカーの指導者でピッチに立つこと』だった。中学校、高校とサッカーを続けながら、サッカーの指導者となる為に教員を目指し、大学は日本体育大学に進学し教員免許を取得した。同時に選手としてもプレー。
大学卒業後、高校の教員となりサッカー部の顧問として指導者のキャリアがスタートし、東京都高校体育連盟サッカー地区選抜コーチや監督を歴任。当時は選手として関東社会人のクラブチームでプレーを継続していたが、選手としてピークを過ぎた 1993 年に J リーグが発足。子供のころから目指していたサッカー指導者となったものの、やはり一人のサッカー選手としてプロ選手になりたかった気持ちもあった。

■プロサッカーの世界で指導者となるために

教員となりサッカー指導者となったが、更に上のカテゴリーを目指したいと思い、最先端のサッカーを科学的に学ぶために 2 年間必死で勉強し、教員でありながらも東京大学大学院に進みサッカーコーチ学を学んだ。その後、自身の転機となる人物と出会い、J リーグベルマーレ平塚のフィジカルコーチに就任することになる。11 年間の教員職を辞めプロ契約のコーチキャリアがスタートした。プロ契約といっても一年契約が主流の世界であり、その現状に留まらず更に高いレベルを目指すために S 級ライセンスを取得し、世界を視野に入れて語学も学んだ。

■プロサッカーの指導者になってから

J リーグ、ベルマーレ平塚のコーチ就任後、セレッソ大阪、浦和レッズ、大宮アルディージャとチームを渡り歩き、2004 年には尚美学園大学でヘッドコーチを務め、2005 年に再び J リーグ横浜 FC のコーチに就任した。横浜 FC 時代では J2 から J1 に昇格する実績も残し、また、三浦知良選手のパーソナルコーチを務めていた実績が評価され、2008 年に当時の名古屋グランパスエイトのストイコビッチ監督からオファーを受けフィジカルコーチに就任した。2009 年には JFA S 級コーチライセンスを取得し、2013 年から 2015 年まで名古屋グランパスエイトのアシスタントコーチを務める。その後、ストイコビッチ氏からのオファーを受け中国スーパーリーグのヘッドコーチに就任。その後、2021 年にストイコビッチ氏がセルビア代表監督に就任した際に直ぐに声がかかり日本人で初めて欧州代表チームのコーチに就任した。



■自身のキャリアを磨く努力

子供の頃にプロサッカーがあればそこを目指し今とは違う人生だったかもしれない。でも、小学生の頃に思い描いた「サッカーの指導者でピッチに立つこと」、この気持ちが変わることはなかった。教員となりサッカー指導者になった頃、また、自身の選手としてのピークが過ぎたころにＪリーグが発足したことも、指導者として更に上の世界を目指すキッカケになっていた。Ｊリーグのコーチに就任してからも一年一年常にコーチ論を勉強していた。語学力の向上も含めて自分なりの努力があったからこそ今があると思っている。日本人で初めて海外代表チームのコーチとしてワールドカップ、欧州選手権（EURO）のピッチに立てたことを誇りに思っている。

■常に次を考えることを大事にしてほしい

サッカーの最高峰であるワールドカップや欧州選手権（EURO）のピッチに指導者として立てた。自身の次のステージはトップチームの監督になることである。スポーツアスリートの人たちもどこかで必ず転機が来ると思う。選手としてプレーしている時期は中々次のキャリアのことを考えることは無いかもしれないが、セカンドキャリアは必ずついて回るもの。選手経験をキャリアマックスとは考えずに、常に次を考え何年か先の自分が何をしたいのかを考えながら生きていくことが大事だと思っている。


СРБИЈА

諦めずにやってきたから今がある。アスリート経験の自信は必ず役にたつ



横山雅美

元Vプレミアリーグ
バレーボール選手　日本代表

ミズノ株式会社
営業開発部コンペティション
スポーツ開発課

バレーボール　masami YOKOYAMA

競技との出会い

1981年生まれ。バレーボールを始めたのは小学校２年生。父親がママさんバレーのコーチをした事をきっかけに姉二人もバレーボールを始め、バレーボールが生活の一部になっていた。

これまでのキャリア

●2002年　デンソーエアリービーズ入団
●2003年　ユニバーシアード日本代表　主将
●2005年　Vプレミアリーグ３位　日本代表候補に選出
●2008年　Vプレミアリーグ準優勝　黒鷲旗（くろわしき）全日本男女選抜バレーボール大会優勝
●2010年　日立リヴァーレに移籍　日本代表メンバー選出（アジア大会出場）
●2011年　アゼルバイジャン　イトゥサチ・バクーに移籍
●2012年　引退

■高校卒業時

文京女子大学付属中学校（現、文京学院大学中学校）から、高校は成徳学園高等学校（現、下北沢成徳高等学校）に進学しインターハイ・春校バレー・国民スポーツ大会にも出場した。
高校卒業時、女子バレーのトップ企業からのオファーはなく、チームメイトの多くは企業チームでプレーすることを選択していたが、自身は嘉悦短期大学（現、嘉悦大学）へ進学する。「企業にお願いして入れてもらっても、少なくても３年程度はレギュラーとして試合に出られない」「嘉悦なら、短大だし１年生からコートに立って経験を積めると思う」と当時の恩師、小川良樹先生の助言もあり、進学を選択した。その学生時代はユニバーシアード日本代表にも選出され、2 年連続全日本インカレでも優勝をはたし、短期大学卒業後はＶプレミアリーグ（現、SV リーグ）に所属するデンソーエアリービーズに入団を決めた。

■現役時代

デンソーエアリービーズでは、セッターとして活躍。入団 2 年目にはユニバーシアード日本代表に再び選出され主将を務めた。2004-05 シーズンではチームを３位に導く活躍を見せ、初めて日本代表候補に選出される。2007-08 シーズンには準優勝を果たし、黒鷲旗（くろわしき）全日本男女選抜バレーボール大会ではチーム初優勝へと導く活躍だった。
セッターとしての評価も高まっていたが、当時同じポジションには後にオリンピックメダリストになった竹下佳江選手の存在は大きかった。竹下選手と比べた時、世界と戦う経験値が圧倒的に少ないと感じ、その差を埋める為にと海外挑戦を決断しチームを退団するも結果的に実現せず、国内の日立リヴァーレに移籍することになるが、１年後に再び海外移籍のチャンスを貰い、アゼルバイジャンのチームに移籍した。



■海外のチームで戦力になれなかった

海外のチームへの移籍に不安もあったが背中を押してくれたのは母親だった。
強い気持ちで挑みやり切った思いもあったが、2009 年に手術した右膝の影響もあり、結果としてチームの戦力になれず１シーズンで日本に戻ることになった。日本のチームでプレーを続けることも可能だったが、当時はこれ以上強い気持ちでプレーすることが難しいと思い引退を決断した。

■選手引退後

選手引退後は、バレーボールの現場から離れてみようと考え派遣登録して仕事を探していた。
タイミング良くミズノ株式会社での派遣業務があるとの事で、派遣社員として仕事を始める。３年間は派遣社員・アルバイト契約で業務に就いていたが、その後契約社員の期間を経て正社員として採用された。通常の業務に加え、バレーボールの普及活動の一環としてコーチ資格を取得し、競技指導やイベントなどにも参加。ネット配信サービスの DAZN（ダゾーン）や BS フジでバレーボール中継の解説なども担当した。
コーチ業ではない形でバレーボールの現場に再び戻れたことに喜びとやりがいを感じることができた。



■スポーツに関わる仕事

現在はミズノ株式会社でバレーボール用品をより多くのチームや企業に使用してもらう営業活動がメイン業務だが、以前は様々なスポーツ競技の営業サポートも行っていたので、バレーボールに限らず様々なスポーツ競技や商品知識を学べ、新たな競技関係者との関係構築や関係者との接点を通して、小学生から社会人チームまで幅広く仕事ができている。また、バレーボール担当としては、社内で数人しかいないエキスパートの仕事にも就けているのでとてもやりがいを感じている。

■次のキャリアでもきっと活躍できる

選手を引退して会社員となった時、最初は沢山の苦労があると思う。でも現役時代に鍛えられたハートやコミュニケーション能力、目標達成に向けた取り組む姿勢は誰にも負けるものではない。色んな仕事を経験してみて自分のやりたいことを見つけることも良いと言うが、やりたいことが見つからない、そんな時は目の前にある物を大事に、一つ一つ積み上げて行く事でも良いと思う。そしていつかやりたい事が見つかり、それに向かって進んでいる時、きっと人生は楽しくなる。

社会の問題を解決するため、社会をより良くしていくために



高瀬克也

元グランドホッケー日本代表選手

株式会社タカセキカク 代表

グランドホッケー　katsuya TAKASE

競技との出会い

1983 年生まれ。母親がホッケーの企業スポーツ選手だったこともあり、１歳の頃からホッケーと触れ合う機会が多かった。ホッケー選手として本格的なスタートは高校に入ってから。当初はデザイン学を勉強したいと思い高校に進学したが、ホッケー部の顧問が母親の１つ下の後輩だったことから体験会に参加し、そこから競技にのめり込んでいった。

これまでのキャリア

●2004 年　大学３年生時、日本代表に選出
●2006 年　名古屋フラーテルホッケーチーム入団、国内４冠達成
●2015 年　国内４冠達成
●2015 年　日本代表引退
●2016 年　リーベ栃木へ移籍
●2017 年　株式会社タカセキカク設立
●2017 年　栃木県代表の選手兼監督として国民スポーツ大会（愛媛県開催）初優勝
●2017 年　日本リーグＨ１リーグ昇格　　現役引退　チーム退団

全国社会人選手権　10 連覇
国際試合出場数　97
国際大会ベスト GK２回受賞

■高校卒業時

高校からホッケー競技を始め直ぐに選手としての能力を発揮し、栃木県の選抜チームに選出され国民スポーツ大会に出場。少年の部で準優勝を獲得したことが評価に繋がり U-18 日本代表に選出される。
元々、デザインを学びたいと思って進学した高校で、将来的にもデザイン関係の仕事をしたいと考えていたが、ホッケー選手としての活躍もあり複数の大学から声がかかった。自身のホッケー選手としての周りの評価を再認識し、大学でも競技を続けることを決意し、天理大学に進学した。

■大学から社会人時代

高校時代からゴールキーパーとして活躍し、大学３年生時に初めて日本代表に選出される。大学卒業後の進路は、当時ホッケー競技を企業スポーツとして取り入れている企業が無かった為、愛知県の自動車系商社に一般就職し、クラブチームの名古屋フラーテルホッケーチームに入団した。就職先の企業の理解もあり平日練習にも参加しながら、社会人選手として競技に取り組むことができた。
入団した年に国内４つの主要大会で優勝するなど、全国社会人選手権では 10 連覇を達成した。



■コーチからのアドバイスと選手引退のキッカケ

ロンドンオリンピックの予選時に、ヨーロッパのトップの GK コーチから競技以外のアドバイスも沢山受けていた。『選手の時に、競技以外の将来のことをしっかり考えて選択肢を作っておくことが大事。その中から自分に合ったベストな選択をすることが大切である』ということを学んだ。当時の自分は一つのスタイルを貫く姿勢だったが、そのアドバイスから考える力が身に付き、競技の視野も広がったことで、選手としてのパフォーマンスも向上していった。
2014 年のアジア大会で惨敗した後の翌年、日本代表のキャプテンに任命される。しかし、新チーム初日の練習で大きな怪我を負ってしまい、3 ヶ月間練習に参加できなかった。
ちょうどその頃に生まれ育った栃木県日光市の雑誌記事を目にした。『消滅可能性都市 日光市・・・』目を疑った。選手としてのピークを過ぎていると感じていたこともあり、怪我からの復帰を目指しつつ、何か故郷のためにできることはないかと真剣に考えるようになっていた。

■故郷に戻ってのセカンドキャリア

2016 年 3 月、会社を退職し故郷の日光市に戻る決断をする。競技以外の選択肢を考えるようになっていたこともあり、大きな怪我と雑誌の記事が自身の次のキャリアに踏み出す大きなきっかけとなった。
日光市から『高瀬さんにはホッケーに携わってほしい』と依頼を受け、地元のクラブチームで２年間選手としてプレーしながら、ホッケーの普及活動にも積極的に関わっていった。最初の１年目は選手としてプレーしながら経営の勉強会に参加したり、WEB デザインの学校に入学してしっかり勉強した。そして、2 年目の 2017 年に WEB デザイン系の会社、株式会社タカセキカクを設立し選手と仕事を両立していくことになる。仕事面の顧客を開拓するべく地元日光市の企業や商店を訪問していたが簡単には仕事が入ってこない。『社会は甘くない』ことを痛感した。それでも、『日光市を元気に！』という想いで何度も企業や商店に訪問し、色んな方々に助けられながら、設立１年が経った頃、周りの口コミで少しずつ仕事が広がっていった。「発注いただいた業務に誠実に取り組んだ評価だと思っています。」
故郷に戻った３年目に選手を引退し、仕事を通してホッケーの普及活動に携わっていった。

■ホッケーの現状と仕事の接点

日光市はホッケーが盛んな街だが様々な実情があった。その実情を解決することを仕事としてやって行こうと動いた。「ホッケーの用具が買えない→ホッケーショップ作る」「チームに入らないとホッケーができない→自由参加型のクラブチームを作って自社で広告を作成」「GK コーチがいない→自身が GK のコーチング事業を行う」「中学校のホッケー部が廃部になった→地域クラブチームを作って自社で広告を作成」「ホッケーの魅力をもっと広めたい→ホッケーの広告を作成」など、自身のホッケー選手としての経験と WEB デザインの仕事が、結果としてホッケーの実情を少しずつ解決し、普及活動にも繋がっていると感じている。

今後も継続して地元地域の企業や商店のプロモーション活動をサポートしていくと同時に、将来的にはヨーロッパのように全世代型のクラブチームや総合型地域スポーツクラブを設立し、地元地域の企業や沢山の人たちと接点を作り、スポーツやホッケー通じて『日光市を元気に！』していきたいと思っている。

■アスリートのマインドは次のキャリアでも活かせる

アスリートとして培ってきたマインドは必ず次のセカンドキャリアでも活かすことができる。自身もコーチからアドバイスを受けた、『選手時代から沢山の選択肢を考えること・・・』とても大事なことだと思う。好きなことや得意なことからでも良いので、選手時代から勉強してしっかり情報収集していってほしい。



スポーツアスリートは、職種を問わずどこに行っても絶対に通用する力がある



後藤翔太

元 神戸製鋼コベルコスティラーズ ラグビー日本代表

株式会社識学

ラグビー　shota GOTO

競技との出会い

1983 年生まれ。小学校 2 年生の頃、当初はアメリカンフットボールをやりたいと思っていたが間違えて地元大分県のラグビースクールに通い始めたことをキッカケにラグビーと出会う。その後、中学校 3 年時までそのスクールで競技を継続する。当時のコーチは厳しい人だったが愛情を強く感じる指導だった。高校は母の出身地でもある神奈川県の桐蔭学園に進学する。

これまでのキャリア

●1998 年　神奈川県桐蔭高校入学　高校 1 年時、3 年時に花園出場
●2001 年　早稲田大学入学　ラグビー部で大学 1 年時、2 年時、4 年時　大学選手権優勝
●2005 年　神戸製鋼コベルコスティラーズ入団　トップリーグ新人賞獲得
●2005 年～2006 年　日本代表選出
●2011 年　現役引退
●2013 年　追手門学院大学女子ラグビー部監督
　　追手門学院高等学校女子ラグビー部監督
●2016 年　大学日本一、高校世界一に導く

●2017 年　株式会社識学入社　組織マネジメントコンサルタント

■ラグビーと勉強の両立

ラグビーと勉強をしっかり両立しながら、高校１年時と３年時に花園全国大会に出場。高校卒業後は早稲田大学に進学しラグビーを続けた。
当時の早稲田大学のラグビー部はリーグ戦でも結果を残せていなかったが、入学した年に清宮監督が就任し一気にチームが強くなっていった。大学１、２年時には大学選手権で優勝、３年時は準優勝、４年時は再び優勝を勝ち取り大学４年間で３回の優勝を経験した。このチーム改革は組織論をしっかりと指導された清宮監督の手腕であり、在学中にその組織論をしっかり学ぶことができた。
大学卒業時には複数の企業チームから誘いを受けた中、神戸製鋼に進むことを決める。

■ラグビーと仕事の両立

神戸製鋼に進む際、プロ契約の選択肢もあったが仕事もしっかりやりたいと考えていたので社員として入社することを決め、資材部に配属された。工場で使用する原料や資材の発注業務など購買戦略を立てながら進める業務だった。
ラグビー選手としては１年目にスクラムハーフのポジションでレギュラーとして活躍し、トップリーグの新人賞を獲得。その後、日本代表に選出され、2005 年のウルグアイ戦で代表デビューを飾る。毎日、業務が終了した後の練習ではあったが練習量は誰にも負けない自信もあった。



■大怪我と選手引退

入社して１年半が経った 2006 年 11 月のワールドカップ予選香港大会で大怪我を負った。長いリハビリ期間を終え、復帰を果たし主将に任命された 2007 年、新監督に平尾氏が就任した。選手復帰を果たすも怪我の影響は予想よりも大きく、自身の満足がいくパフォーマンスが発揮できず、選手としてのキャリアは長くないと感じるようになっていた。それでも、主将になり平尾監督が就任された年でもあったので少しでもパフォーマンスを上げようと努力したが、満足できるパフォーマンスは出せなかった。
社会人６年目の 28 歳のシーズンを最後に選手を引退。入社時から仕事も両立していたので、引退後は資材部の業務に専念した。

■指導者としてのチャレンジ

選手引退から２年が経った頃、資材部での仕事の責任領域も広がりやりがいを感じながら業務に取り組んでいたが、トッププレーヤーとして続けてきたラグビーにもう一度関わりたいと思うようになる。大学時代に学んだ組織論を活用して選手指導をやっていきたいと考え指導者の道に進むこと

を決断する。
指導者としての誘いが多かった中で、新しい領域の指導にチャレンジしてみようと思い、追手門学院大学の女子７人制ラグビーの指導者に就き、同時に追手門学院高校の女子ラグビー部を創設した。就任から３年後に大学日本一に輝き、高校の女子ラグビー部も日本一に導いた。
そして、指導者の契約期間が４年で満了となり退任となった。

■自身が学んだことと指導者経験を生かして

指導者の契約満了後、早稲田大学ラグビー部の先輩が在籍している株式会社識学に組織コンサルタントとして入社。主にスポーツチームの組織マネジメントの仕事で、選手一人ひとりの能力を「運動能力」「技術」「判断力」の３つに分けて数値化しパフォーマンス評価を行いながら個別の目標を設定していく。直ぐに動き出せる選手、動き出せない選手に分かれるが、「選手自身が自分を知る」ことが次のパフォーマンスに繋がっていくことをしっかりと伝える役割であり、これからも沢山の選手に伝えていきたいと思っている。
また、その業務に就きながらラグビーの試合の解説や早稲田大学ラグビー部の指導も行っている。2023 年のラグビーワールドカップでも解説を担当。
「8 万人の観衆の中で試合展開を解説する仕事ができたことは、元ラグビー選手としても素晴らしい経験になりました。」

■目標を設定してしっかり動いていくことが大事

ラグビーやチームスポーツは自分一人だけでは何もできない。周りの沢山の人たちのサポートがあって前に進んでいけることを感じている。失敗しても沢山の仲間がいるし時には頼ってもいい。小さな目標からでもいいので、自分で目標を設定して周りに相談しながらしっかり動いていくことが大事だと思う。
アスリートはどこに行ってもやり切る力があるはずだと信じている。


RUGBY
WORLD CUP
FRANCE 2023

選手寿命は想像以上に短い。何をやりたいか



桐谷乃宇奈

元フェンシング日本代表選手

ソウルオリンピック出場

フェンシング　nouna KIRITANI

競技との出会い

1967 年生まれ。母と兄が自宅近くのフェンシングスクールに入っていた影響から、小学校 1 年生の時に自身もスクールに入り中学校卒業まで通った。高校でも競技継続を見据えフェンシング部がある高校の部活動に体験入部させてもらったことをきっかけに、その高校から中学校に連絡が入り入学することになった。高校では 3 年時に日本代表選出され、世界ジュニア選手権に出場した。

これまでのキャリア

●1985 年　世界ジュニア選手権出場
●1986 年　日本体育大学入学
●1986 年　インカレ団体優勝（大学時代は 3 度優勝）個人 2 位
●1988 年　ソウルオリンピック出場
●1990 年　アジア競技大会銀メダル
●1995 年　成城学園初等学校教員

■高校、大学、社会人時代

高校での活躍もあり複数の大学から誘いを受けた中、将来は保健体育の教員になる目標を持ち日本体育大学への進学を選択した。大学１年から３年生時にインカレ団体優勝と個人戦２位。４年生時に団体２位の結果を残し、３年生時には日本代表選手としてソウルオリンピックに出場した。在学中に保健体育の教員資格を取得したが、大学の教員資格も取得する為に大学院に進んだ。フェンシングは企業スポーツが無いため卒業後は非常勤の大学講師や専門学校の教員、エアロビクスのインストラクターで生計を立てながらクラブチームに所属し競技を継続していた。競技の遠征費のみクラブチームからのサポートがあったが出費は多かった。



■新しいキャリアステージ

大学院に進んだ後も次のオリンピックを目指していたが絶対的な練習量は少なくなり、筋肉量やアジリティもこれ以上進化はないと感じ始めていた。その頃からトップ選手としてフェンシングを続けることは厳しいと感じ、将来のことを考えて大学院卒業後にエアロビクスインストラクターの資格を取得した。その資格はトレーニングにも役に立ち、ナショナルチームの合宿でもエアロビトレーニングとして取り入れていた。

大学院卒業後の３年間は研究員として働き（無給)、日本体育大学研究員として選手登録して競技を継続していたが、収入面の安定を考え、中学校、高校の保健体育教員になる為の就職活動も始めていた。ちょうどその頃、幼少期に育ててもらったフェンシングスクールの先生から、専科制があ

る私立の小学校が保健体育の教員を探しているという話を聞いた。中学校、高校の保健体育教員資格でも小学校の教員になれるということで、その小学校に訪問した。体育授業以外にも子供たちと接する機会があり様々な取り組みがある学校で、体育教員のみではなく演劇などの指導も行う役割もあった。子供たちとの接し方が評価され、その小学校の教員として採用された。
教員としての新しいステージがスタートしたこともあり、フェンシング選手としてはワールドカップで良い成績を残すことができなければ日本代表から外れようと考えていた。結果、ワールドカップでは良い成績を残せず、日本代表選手から外れる決断をする。

■競技との両立

日本代表からは外れたが競技は継続していた。大きな怪我をして競技ができない時期もあったが、国民スポーツ大会に出場するなど教員という仕事と両立していた。しかし、大会がある時は学校を休む時もあったり、仕事の為大会を欠場することもあり、競技と仕事の両立が難しかった。当時は、『先生も頑張っているぞ！』と子供たちに見せることも大事だと思っていた。ただ、練習に使える時間が少しずつ短くなり、筋力が落ちてきていることも感じていたので、競技者として更に上を目指すことは断念した。

■教員となって

大学進学時は中学校、高校の保健体育の教員を目指していたが、小学校の教員になれたことを今でもとても嬉しく思っている。「授業の時はとても厳しいが、授業から離れるととても親しみやすい先生」と子供たちは言う。教員同士もあだ名で呼び合い「キリちゃん」と呼ばれ、そんな親しみやすい雰囲気の中でもアスリートとして培ってきた精神力と熱量で子供たちと接して来た。「教員という仕事は日々の子供たちの成長を感じ取れるとてもやりがいのある仕事」と思っている。また、今は日本体育大学のフェンシング部の監督も務め、競技を通して選手そして子供たちと向き合っている。

■現役時代に何をやりたいかを考えることが大事

自身も現役時代はフェンシング一筋だったが、教員になりたいという目標を持てたことがとても良かったと思っている。仕事との両立はとても大変だったが、必死にチャレンジしたことで子供たちに伝えることも沢山作れた。諦めない、考える、やってみる、ということをこれからも子供たちにしっかりと伝えていきたい。



現役のうちにフットワークよく動き回って人脈をひろめることが大事



三木萌子

元ジェフユナイテッド市原・千葉レディースなでしこリーガー

FBモーゲージ株式会社
プロモーション事業部
アスリートプロジェクト担当

女子サッカー　moeko　MIKI

競技との出会い

1998 年生まれ。サッカーが盛んな街、埼玉県浦和市（当時）で育ち幼少期から女子サッカーチームに入り、小学校でも女子チーム浦和ラッキーズ FC でプレイ。中学校１年生から高校３年生の６年間はＪリーグユースの浦和レッズ女子チームで競技を継続していた。

これまでのキャリア

●2003 年～2005 年　あかつき幼稚園サッカークラブ
●2004 年～2009 年　浦和ラッキーズ FC
●2010 年～2011 年　浦和レッドダイヤモンズレディースジュニアユース
●2012 年～2015 年　浦和レッドダイヤモンズレディースユース
●2016 年～2019 年　順天堂大学女子蹴球部
●2020 年～　ジェフユナイテッド市原・千葉レディース
●2020 年　引退
●2021 年　FB モーゲージ株式会社入社

■高校卒業後の進路

高校卒業後の進路は、なでしこリーグに進むか大学に進学するか迷ったが、両親と相談し将来のことも考え、メディカル系の資格を取得することを目指し順天堂大学に進学する。大学の女子サッカー部に所属し競技を継続しながら当初はアスレティックトレーナーの資格取得を目指していたが、競技との両立が難しかったため大学３年生時に保健体育の教員免許取得にシフトチェンジし、中学校、高校の保健体育の教員免許を取得した。サッカーは大学までと決め、大学卒業後の進路は一般企業への就職活動もしていた。
大学４年生の春頃には数社の内定を獲得していたが、サッカー部の監督から「サッカーは今しかできない」と言葉を掛けられ気持ちが変わった。大学からも近かったジェフユナイテッド千葉（当時）の練習に参加。見事加入内定となり入団した。



■社会人現役時代

当時はまだ女子のプロリーグは無く、チームスポンサー企業で働きながらの選手契約だった。自身は整形外科の医療事務とリハビリ助手の仕事に就いた。チームに入団する前から、競技に全力で取り組みながらもっと広い視点を持ちたいと考えていたのでサッカーは２年間と決めていたが、怪我や体調不良で競技継続が難しくなり２年を待たず１年目の 2021 年に現役引退を決意する。

■選手引退後

チーム退団後、実家に戻りしばらくは居酒屋でアルバイトをしていた。その後、体調も回復し正社員で働いていくべく就職活動を始め、地元埼玉県に拠点を置く FB モーゲージ株式会社に転職する。住宅関連の事業がメインの中で、スポーツイベントの企画運営やそのイベントを通して会社のプロモーションを行っていく事業部に配属となった。会社のプロモーションと同時にアスリートへの支援を実施していく業務で、地元の幼稚園や保育園でアスリートと一緒に運動教室などを開催している。



■元アスリートとしてのアスリート支援

もう一つのアスリート支援プロジェクトとして 2023 年 9 月から SUNNYS という EC サイトも展開している。『女性アスリートが競技以外でも活躍し、収入にも繋がる仕組みや環境を作りたい』という考えから、全国の女性アスリートのオリジナル商品を EC サイトで販売している。
日々の業務も忙しくなりゆっくり休める時間も少なくなっているが、仕事を通して現役の女性アスリートや引退した女性アスリートの応援ができていることが嬉しい。引き続き、アスリートの支援にも繋がる業務を継続しながら、自身ももっと視野を広げて新しいことにもチャレンジしていきたいと考えている。

■フットワークよく動くこと

現役のアスリートというのは一つのブランドでもあると思う。現役の時からフットワークよく外に

出て沢山の人脈を作っていってほしい。それがセカンドキャリアに生きる時が必ずくると思うから。



現役時代にしっかりと人脈を作っておく。そしてセカンドキャリアに繋げていく



元Jリーガー　U-19日本代表

マーマレーション株式会社
illbe 事業責任者

廣瀬智靖

サッカー　tomoyasu HIROSE

競技との出会い

1989 年生まれ。小学校 1 年生から地元の少年団チームでサッカーを始め、小学校 3 年生で強豪の江南南 SS でサッカーを続ける。6 年生時に全国大会に出場した。中学校時は埼玉県のクマガヤ SC に所属し、卒業後はＪリーグユースチームに入団することが決まっていたが、群馬県の前橋育英高校の山田先生の熱意を受け、高校の部活動でサッカーを継続することを決断した。

これまでのキャリア

●2005 年～2007 年　前橋育英高校
●2008 年　U-19 日本代表
●2008 年～2014 年　モンテディオ山形
●2014 年～2015 年　徳島ヴォルティス
●2016 年　株式会社トゥモローランド入社
●2021 年　マーマレーション株式会社へ入社　『illbe』を立ち上げる

■高校卒業後の進路

高校２年生、３年生時に全国大会に出場。１年生時に元Ｊリーガーのコーチの指導を受け、Ｊリーガーを目指すようになった。
2 年生の春からＪリーグチームの練習にも参加するようになり、３年生時には U-18 日本代表の海外キャンプに参加予定だったが、直前の怪我により参加を断念する。入団を目指していたＪリーグチームからの誘いが無くなってしまったが、３年生時の冬の全国大会で優秀選手に選出されたことでその活躍が評価され、当時Ｊ２リーグのモンテディオ山形に入団した。

■選手現役時代

Ｊリーガー１年目と２年目に U-19 日本代表に選出されたが、後の日本代表の香川真司選手などのプレーを目のあたりにし自身とのレベルの差を痛感する。
その後、2012 年ロンドンオリンピックの日本代表に選出されなかったことで、「自分はトップには行けずに、J1 と J2 を行き来する選手で終わるかもしれない」と感じ始め、Ｊリーガーとなって５年が経過した 23 歳の頃から次のキャリアを考えるようになった。
3 年後の 26 歳の時に選手を引退。
サッカーをやり切ることだけを考えて取り組んでいた最後のシーズンが自身のサッカー人生のピークだった。



■選手引退後

選手時代に慕っていた先輩の影響で洋服が好きになり、週２回はアパレルショップに足を運んだ。その頃から選手引退後はアパレル業界に進みたいと考えていた。
引退後に、選手時代にお世話になっていた徳島県のアパレルメーカー『ナルトトランクス』の社長に会ってアパレル業界で働きたいと相談し、モノ作りの良し悪しを学べるからと株式会社トゥモローランドを紹介してもらう。
全く経験も無く不安な部分も多かったが、「自分を信じてやるしかない」と覚悟を持って入社したのがアパレル業界への第一歩だった。

■セカンドキャリアの最初は苦労した

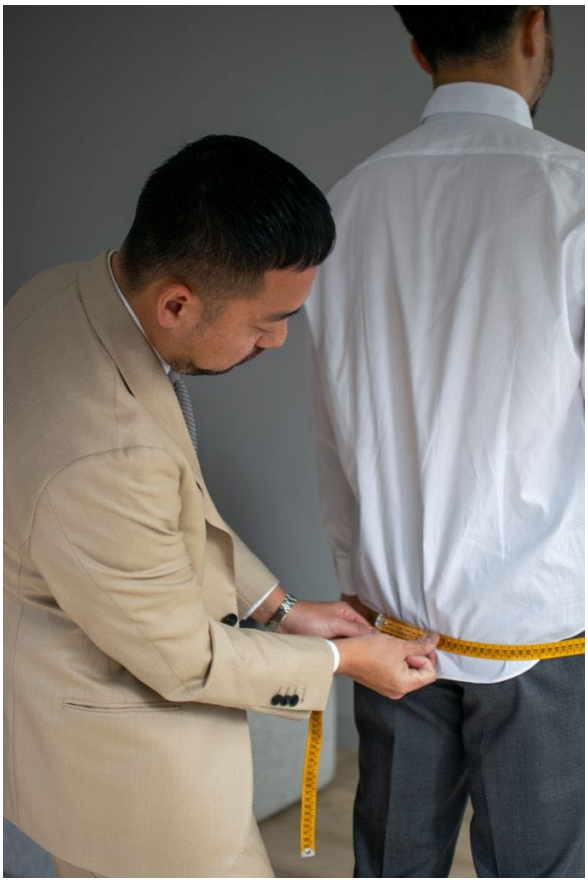
パソコン操作ができない、電話対応ができない、アパレルの知識もないところからのスタートで、「本当にサッカーしかやって来なかったんだね」と言われたこともあった。アルバイトの経験も無く接客もできず最初は本当に苦労したが、「やるしかない」と常に自身に言い聞かせ、多くのことを真摯に学んでいった。
現場で５年勤務する中で周りのスタッフからの指導を受け、知識もスキルも成長した。社内のトップセールスになり店舗責任者にもなれたが、「洋服を通して、自分を育ててくれたサッカー界に恩返ししたい」という思いから、次のステップに踏み出すことを決意する。

■新たなステップ

アパレルの世界に入って５年半が経った頃、同じ職場の先輩が立ち上げたマーマレーション株式会社に転職した。アパレルグッズの企画を行っている会社で、Ｊリーグのグッズ作成にも携わっていた。
その中で、自身の経歴を知っていたチームから「チームスーツを作れますか」という相談を受けたことをきっかけに、オーダースーツやジャケットを手掛ける『illbe（アイルビー)』というブランドを立ち上げた。
その後、自身が在籍していたモンテディオ山形のチームスーツを地元の米沢織を使ってプロデュースするなど、『山形を繋ぐ』というコンセプトのもと、『クラブと地元の産業を繋ぐディレクター』としての仕事も担当している。
選手時代から名刺を作り、沢山の人との出会いを作ろうと積極的に行動していたことが、今とても大きな成果となっている。

■全ては自分自身が動くことから

「競技を第一優先でやり切るまでやってほしい。同時に自分の価値を客観的に見て行動を起こして、知識も蓄えていってほしい。アスリートは目標と結果にコミットする習慣が身に付いているが、そこには行動力が必要だと思う。」
全ては自分自身が動くことから。これからも自分のブランドが世界中に広がるという夢を持って常に前向きに歩んでいきたいと話す。



ラグビー以外の分野から学び、得たことのほうが、私自身のラグビー人生や”今”に大きく影響している



元NTTコミュニケーションズ
シャイニングアークス
7人制ラグビー日本代表
NTTコミュニケーションズ
株式会社

友井川拓

ラグビー　hiraku TOMOIGAWA

競技との出会い

1984年生まれ。父親が体育教員としてラグビーの指導をしていた影響で５歳の時にラグビーを始め、中学校卒業まで地元神奈川県の藤沢ラグビー蹴球倶楽部で競技を継続。高校は法政大学第二高等学校に進学し、スタンドオフやスクラムハーフなどバックスのポジションで活躍。高校３年生時に花園全国大会に出場した。

これまでのキャリア

●2000年　法政大学第二高等学校　3年生時に花園出場
●2002年　U-19日本代表
●2003年　法政大学入学
●2007年　NTTコミュニケーションズ株式会社入社
　　NTTコミュニケーションズシャイニングアークス入団
●2010年　７人制ラグビー日本代表
●2018年　引退　NTTコミュニケーションズシャイニングアークスコーチ就任

■大学進学と卒業後の進路

中学校の頃から「法政大学でラグビーがしたい」と考えていたので法政大学第二高等学校に進学し、その後法政大学に入学する。
当時は社会人までラグビーを続けるイメージは無かった。大学でしっかりラグビーのキャリアを残し、チームも大学選手権優勝を目指していたが、大学選手権ではベスト４が最高成績で、大学最後の年である４年生時はベスト８で敗退。
大学卒業後の進路は、３年生の頃から「競技と仕事の両立がしっかりできる企業に進みたい」と考えていたので、当時のラグビートップリーグのチームから誘いがあった中、NTT 東日本へ入社。入社２年目にチームが NTT コミュニケーションズのシンボルチームになったことで転籍となる。入社した当初からビジネスマンとしても活躍したいと思っていたので、現役選手を長く続けるつもりは無かった。

■競技と仕事の両立

入社当時は 9 時から 17 時まで通常に勤務し、オフィスから 1 時間程かかるグラウンドに移動、20 時から練習開始というスケジュールだった。
入社 4 年目の 2010 年に 7 人制ラグビーの日本代表に選出され、2010 年から 2013 年の期間は所属チームの 15 人制ラグビーと 7 人制ラグビーを兼務。7 人制ラグビーは 1 日に 3 試合あることもあり、勝ち進めば翌日に決勝戦という非常にハードな種目で体力的にも負担が大きかったが、自身のパフォーマンスは想像以上に良くなり、周りからの評価や期待も高くなっていた。
「当時は仕事の面でも順調に成長できていたことが競技にも良い影響を与えていたと思うし、そのバランスが良かった」と振り返る。入社した当初は現役選手を長く続けるつもりは無かったが、大学時代に思い描いていた競技と仕事の両立を実現していく中で競技のパフォーマンスも向上し、結果的に 34 歳まで 12 年間の現役生活を送っていた。



■選手引退後

現役選手引退後はラグビーから離れ社業に専念するつもりでいたが、チームからコーチ職の打診を受ける。
3 年間は社業から離れてチームのコーチ業に専念した。その期間に、将来はアスリートのキャリアサポートの仕事をやっていきたいと思うようになり、そこに近い仕事をしている友人に相談し転職することも考えていた。
しかし、「アスリートに限らず人のキャリアに寄り添える仕事に就きたい。それであれば今の会社でもできる」と考え、社業に戻り現在は会社の人事系業務に就いている。現役選手時代やコーチ時代に身に付いたメンタル、リーダーシップ、マネジメントスキル、コーチングなどのポータブルスキルが、今の人事系業務にとても役立っていると感じている。

■競技の枠を超えた人や分野から学ぶこと

「アスリート＝ビジネスでも活躍できる」は少し違うと思っている。アスリートは、人への伝え方やコミュニケーションの取り方、目標を設定し戦略を練り、そこに向かって前進していく力と経験は十分ある。それを上手く言語化していくスキルを磨くことがとても大事だと思う。アスリート時代の経験を言葉にできないと意味が無い。
競技の枠を超えてアスリート経験の無い人との接点を積極的に作ることなど、自ら行動して競技以

外の分野からも多くのことを学ぶ意識が必要だと思う。その行動力と磨かれたスキルを武器に、ビジネスの世界でも活躍していってほしい。



SPORT CAREER SUPPORT CONSORTIUM
スポーツキャリアサポートコンソーシアム

情熱さえあればトップアスリートは何でもできる



山田拓朗

元パラリンピック競泳選手
株式会社NTTドコモ
総務人事部 労務厚生担当

パラ競泳　takuro YAMADA

競技との出会い

1991年生まれ。幼少期に水が苦手だった姿を見た両親がスイミングスクールに通わせたのが水泳との出会い。小学校3年生から競泳コースに進み、障害の無い選手と共に週6日練習していた。障害があったにもかかわらず一般選手も含めた県大会で優勝し、6年生時に初めて国際大会となるアジアユース大会に出場。中学1年生の時にパラリンピックの400m自由形の参加標準記録を突破し、アテネパラリンピック大会に初めて出場した。

これまでのキャリア

●2004年　アテネパラリンピック大会出場
●2008年　北京パラリンピック大会　100m自由形　5位
●2010年　筑波大学入学
●2012年　ロンドンパラリンピック大会　50m自由形　4位
●2014年　NTTドコモ入社
●2015年　ジャパンパラ水泳競技大会　50m自由形　100m自由形　優勝
　　日本身体障がい者水泳大会　50m自由形　100m自由形　優勝
●2016年　リオパラリンピック大会　50m自由形　銅メダル
●2021年　日本パラ水泳選手権大会　50m自由形　100m自由形　100m平泳ぎ　優勝

ジャパンパラ水泳競技大会　50m 自由形　100m 自由形　100m 平泳ぎ　優勝
●2021 年　東京パラリンピック大会　200m 個人メドレー８位　４×100m メドレーリレー8 位

■高校、大学でもパラリンピック大会に出場

高校に入学後、水泳部に所属しながらスイミングスクールでも練習を続け、高校２年生時に北京パラリンピック大会に出場した。メダル獲得を目指していたが 100m 自由形で５位の結果に終わる。「パラリンピック選手として結果を残したい」という気持ちが更に強くなり、当時から水泳のレベルが高かった筑波大学に AC 入試（一般的には AO 入試）で進学する。筑波大学の水泳部にはオリンピック出場を目指している選手も多く、その選手たちの中で同じ練習メニューに取り組み、大学３年生時に３大会連続となるロンドンパラリンピック大会に出場。50m 自由形で４位の結果を残した。

■仕事と競技の両立ができる環境

大学卒業後は、競技に専念できる企業の選択肢もあったが、仕事と競技を両立するために「自分自身で道を切り拓いていこう」と考え、通常の就職活動、一般試験を経て、NTT ドコモに入社した。会社では以前から個人競技を支援する制度があったが、該当する社員はいなかった。自身の入社のタイミングに合わせて個人として制度認定できるよう準備を進めてもらい、仕事と競技の両立ができるようになった。３大会連続でパラリンピック大会に出場するものの、メダル獲得という“結果を残す”ことが実現できていなかったが、社会人３年目に４大会連続出場となったリオパラリンピック大会の 50m 自由形で悲願の銅メダルを獲得。
「パラリンピック選手として結果を残すことができてとても嬉しかった。その結果を振り返ると、日々の会社業務に就く環境が競技パフォーマンスの向上にも繋がっていたと感じています。」



■選手引退後

2021 年の東京パラリンピック大会に５大会連続で出場。200m 個人メドレー８位入賞という結果で終わる。この時、「年齢や体力的に、次のパリ大会ではこれ以上タイムを伸ばすことは難しいだろう」と感じ、2023 年に選手引退を決意した。
引退後は、「社業に専念＝新しい挑戦」と捉え総務人事部に所属し、厚生担当として主にシンボルチームや公認職場サークル等に関わる業務を担当している。
引退後改めて、同期入社の仲間たちの日々の業務に対する姿勢に刺激を受け、これからも会社の中で”やってみたい、チャレンジしてみたい”業務を見つけ積極的に取り組んでいきたいと思っている。

■競技への情熱を次のやりたいことへ

東京オリンピック、パラリンピック大会終了後、アスリートを応援してくれる企業が増えてきていると感じる。練習環境も少しずつ整備されてきている。あとは、引退後のキャリアについてアスリート自身がいつ考え、準備するかだと思う。競技に向けていた情熱を自身の次のキャリアにもしっかり活用してほしい。


docomo

スポーツは楽しいという気持ちで始めた時のことを忘れずに



競技との出会い

1996 年生まれ。５歳の時に自転車用のヘルメットを購入しようと訪れたお店で、インラインスケートの道具を見て一目惚れ。そこからインラインスケートに夢中になり、地元の岡山市にあるアクションパーク岡山というアーバンスポーツができる施設で練習するようになる。当時、そのアクションパークで練習をしていたインラインスケート選手の姿に魅了され、本格的に競技に取り組むようになる。

これまでのキャリア

●2015 年　　環太平洋大学体育学部健康科学科入学
●2010 年　　「Chazsands invitational　2010」　優勝
●2011 年　　「Winter clash 2011」　優勝
●2014 年　　「Pow-wow 2014/2015」優勝
●2017 年　　(World Roller Games) Roller Freesty　世界選手権　優勝
●2019 年　　(World Roller Games) Roller Freesty　世界選手権　優勝
●2022 年　　(World Roller Games) Roller Freesty　世界選手権　優勝

●2018 年～2023 年　　「岡山市人見絹枝スポーツ顕彰」受賞

■競技推薦で進学はできなかった

インラインスケートの大会で良い成績を残してもスポーツ推薦での進学の道は無く、特に女性選手は高校受験のタイミングで競技を辞めるケースが多かったが、自身は競技を長く続けたいと思っていたので中学校受験で中高一貫校に進学した。
しかし、練習拠点としていた地元の施設が閉鎖。岡山県から神戸市の施設に月に数回通って練習するしか無かったが、貴重な練習時間を有意義な時間にすることができていた。

■新しい目標と競技の両立

アグレッシブ・インラインスケートは、捻挫、打撲、骨折、脱臼などの怪我が多い競技でもあったので、中学生の頃から将来は大学に進学し、柔道整復師の資格を取ろうと考えていた。「怪我の治療ができる資格を取得して、出来るだけ長く競技を続けたいと考えていました。」
大会等の遠征で授業を休むこともあったが、競技との両立を強く意識し、勉強の時間もしっかり作っていた。「柔道整復師の勉強はとても大変でしたが、勉強との両立で競技のパフォーマンスも向上していたと思います」と当時を振り返る。
大学在学中の 2017 年から世界選手権が始まり、日本代表として出場。2017 年・2019 年・2022 年に世界選手権で優勝している。

■仕事と競技の両立

大学４年生時に目標としていた柔道整復師国家試験、健康運動指導士試験に合格し資格を取得した。卒業後は、在学中から選手として所属していた会社に引き続き所属していたが、大会の遠征費の支給も限られており、他に収入が無かったので全ての大会に出場することは難しかった。
そんな時に、卒業した大学から「職員として働きながら競技を続けてみないか」と声を掛けられ、2020 年から環太平洋大学で助手として勤務し、国家試験対策の補講や、柔道整復師の実技授業の補助に就いている。週３日勤務し、週４日を競技の為に使うことができるようになり、仕事と競技の両立もできるようになった。



■競技の認知度を上げていきたい

大学在学中の 2017 年から始まった世界選手権で３連覇を達成した功績が大学から認められ、今ではインラインスケートで推薦入学できる学校もあるという。しかし、競技の認知度はまだまだ高くない。世界選手権等の公式競技大会よりもイベント性の高い大会の方が注目度は高い。インラインスケートが好きだからこれからも競技を続けていくが、将来的には指導者になりたいと思っており、岡山市にある練習拠点の山田グリーンパークでもスクールを開設し、岡山県のアーバンスポーツ協会（スケートボードや BMX も加盟）の理事としても活動している。
スケートボードや BMX がオリンピック種目となった影響で、少しずつではあるがインラインスケートの認知度も上がってきていると実感しており、これからも子供たちに競技の楽しさや魅力をしっかりと伝えていきたいと思っている。

■競技がきっかけとなって

不登校になっていた子が、インラインスケートを始めたことで学校に通い始めたという話を聞いた。個人競技ではあるが、練習方法や技の習得など選手の中でもコミュニティがあり、その場が楽しく元気になるきっかけになっていたらとても嬉しい。まだまだマイナー競技ではあるが、これか

らも沢山の子供たちに競技に触れてもらう機会を作っていきたい。



現役アスリート時代から積極的な発信が必要。それが個性となり新しい繋がりを生む。



吉野有香

元なでしこリーガー
株式会社ゆかサル
代表取締役社長

女子サッカー　yuka YOSHINO

競技との出会い

1991 年生まれ。父と兄の影響で小学校 1 年生時から地元の女子サッカーチームでサッカーを始める。中学校時は名古屋 FC レディースで全国大会に出場し、その時の活躍によりナショナルトレセン（全国の各地区から選抜され、選考会を通過し選出される）に選出された。

これまでのキャリア

●2007 年　常盤木学園高等学校入学
●2007 年、2008 年　全日本 U-18 女子サッカー選手権大会優勝
●2008 年、2009 年　全日本高等学校女子サッカー選手権大会優勝
●2010 年　関西大学入学、なでしこリーグ 1 部スペランツァ FC 大阪高槻入団
●2013 年　なでしこリーグ 2 部バニーズ京都 SC に移籍
●2015 年　現役引退
●2020 年　株式会社ゆかサル設立

■高校時代

高校は、女子サッカーの名門校である宮城県の常盤木学園高等学校に進学。愛知県から出て親元を離れ女子サッカー部の寮生活だったが当時はとてもわくわくしていた。
高校１年生、２年生時に全日本 U-18 女子サッカー選手権大会優勝、高校 2 年生、3 年生時に全日本高等学校女子サッカー選手権大会で優勝。ボランチ、サイドバック、フォワードなど高校時代は複数のポジションを経験していた。
周りの選手のレベルも高く、「生まれながらにして才能がある選手っているんだな、努力しても敵わない人がいると感じ、サッカー選手としての自分の将来を考え始めました」と振り返る。ただ、そんな 3 年間の中でも、なでしこリーガーになりたいとずっと思っていた。

■高校卒業後の進路となでしこリーグ入団

当時の女子サッカーはプロ契約が無かったので、高校卒業後に就職して働きながらなでしこリーグのチームに入団する選手や、大学に進学し部活動でサッカーを続ける選手もいたが、自身は指定校推薦で関西大学に進学し、大学生でありながらなでしこリーグ 1 部（当時）のスペランツァ FC 大阪高槻に入団した。この時点ではまだサッカー選手として頑張りたいと思っていたが、高校 3 年生時に大きな怪我をして長いリハビリ期間を経験したことをキッカケに、メンタルの分野を勉強したいと考え始めた。
その後も大きな怪我が続き、大学 3 年生時に戦力外通告を受け、なでしこリーグ 2 部（当時）のバニーズ京都に移籍。レギュラーとして活躍していたが、翌年再び大きな怪我を負い、復活するも納得のいくプレーができなくなり 24 歳で現役を引退した。



■選手引退後

現役の終盤から引退して半年の間は所属していたチームのスポンサー企業で働いていたが、暫くは怪我のリハビリ期間だった。
その後、実家に戻り自営業の父の現場仕事を手伝ったり、一時サッカーから離れた期間もあったが「やはりサッカーに関わる仕事がしたい」と思い、現役時代から応援してくれていた人達との繋がりから個人事業主として起業し、サッカー教室を開催していた。

■起業して女子サッカーチームを運営

2020 年に京都府京丹後市に女子サッカーチームの運営母体として、株式会社ゆかサルを設立。
自分自身のサッカー人生を振り返り、「自分のために続けてきたサッカーなのに辛い思いを沢山していた。辛いサッカーではなく、楽しいサッカーを形にすべくチームを作りました。」その女子サッカーチーム『KYOTO TANGO QUEENS』は 2024 年度関西リーグ 2 部で優勝し、1 部に昇格した。選手も中学生から社会人まで 30 人ほどの選手が在籍している。社会人選手もプロ契約ではないので、京丹後市の地元企業で働きながら夜の時間に練習している。寮の家賃は会社が負担するなど、“楽しいサッカー”ができる環境を整えている。

■チーム運営と楽しいサッカーをモットーに

チーム運営において、繋がりを切らさない努力が不可欠である。チームのホームページでの活動報告とは別に、応援してくれているスポンサー企業に毎月手紙を届けている。
また、“楽しいサッカー”をモットーに活動しているチームとして、選手一人ひとりの心が安定していることがとても大事だと思っている。「選手の気持ちの変化に早く気付けることが大事なので、自分もチームの指導者も日頃からしっかりコミュニケーションを取ることを意識しています。」競技以外の部分でも選手を肯定できる指導者の育成もしていきたい。

■現役アスリートに伝えたいこと

自分自身は、なでしこリーガーにはなったが決して有名な選手では無かった。現役時代も怪我が多く出場試合も少なかったが、SNS を使って試合日程の告知やグッズ販売などでチームに貢献した。自分のやれることは全力で取り組んでいたからこそ、沢山の人たちとの繋がりができた。現役アスリートも空いている時間を有効活用してほしい。もっと積極的に動いていけばそれが個性になって、沢山の人たちと繋がることができるはずだから。


昇格ありがとう